じごぜんひろば

No.102　2021年（令和3年）4月1日　　地御前地区自治会

東京オリンピック出場内定
『地御前の星』河田 悠希

広島県アーチェリー場（安佐南区八木）で練習に励む堂々とした体躯の河田悠希選手（エディオン提供）

去る3月21・22日アーチェリーの東京五輪選考会が行われ地元地御前出身の河田悠希さん（エディオン）が見事1位で代表を射止めた。同選手は平成27年佐伯高校2年当時に比類無き活躍で話題となった。（本紙No.80に掲載）

この年、長崎国体・全日本アーチェリー選手権の2大会を制し翌年のリオオリンピック出場を目指し頑張っていたが、僅かの差で選考会に敗れ、オリンピックの出場を逸した。

その後、日本体育大学に進み練習に励んだが、腰痛で苦しみ、低迷した時期もあった。日体大卒業後、昨春地元のエディオンに就職し練習環境にも恵まれ今回の快挙となった。

彼のアーチェリーとの出会いは地御前小3年の時、祖父に連れられて行った廿日市桜祭。イベントの「アーチェリー体験会」で遊んだことが始まり。その後興味を示し、津田の佐伯国際アーチェリーランドに通い、本格的なアーチェリーを。そのため佐伯中学・佐伯高校に進学。その間地御前から母親の運転で通学した。毎日2往復6年間、並大抵の事でない。我が子を信じ、育て上げた家族愛が今日の成長となった。

五輪選考会から帰広して早速インタビューを試みたが、勤務と練習で、時間の調整がつかず電話でのインタビューとなった。その概要は以下の通り。

Q1．大学4年間の競技生活は如何なものでしたか？

A1 腰痛などの故障で苦しみましたが、大学4年生の時に全日本選手権で優勝。またインドアー競技では日本記録も樹立することができて、強化候補選手には入っていました。

Q2．五輪選考会では2日間とも1位通過。心境は如何でしたか。

A2 初日は異常に緊張し得点も673点。（自己最高には12点足らず）明日頑張らねばと思った。2日目、この日は雨風が激しく最悪なコンディション、しかし不思議に前日と違い緊張はありませんでした。

Q3．東京五輪の目標は？

A3 勿論、金を狙います。

Q4．夢のオリンピック代表、どなたに感謝したいですか？

A4 これまで育ててくれた両親を含め、ご支援ご声援頂いた方々に感謝を伝えたいです。

〈取材後の感想〉

7月のオリンピックまでには4月に世界選手権大会の予選会などあり練習に余念がない。是非、東京五輪優勝の金字塔を期待したい。（Y・Y）

龍宮神社　貝祭り

3月19日（金曜日）午後5時から龍宮神社で貝祭りが行われ、約20名が参列した。地御前神社の飯田宮司が祭祀を執り行った。旧暦2月9日（月齢7日半・上弦の月）に行われてきたが、現在では直近の金曜日に行われている。

海の安全祈願と海産物の供養のためのお祭りとして毎年行われており、修祓（しゅばつ）献饌（けんせん）祝詞奏上（のりとそうじょう）玉串奉奠（たまぐしほうてん）撤饌（てっせん）の後にお神酒（おみき）が振る舞われた。

龍宮神社は氏子のいない神社で、地御前漁協がお世話をしているとのこと。祭祀の終了後に後片付けをしていると、小柄な女性が祭壇に手を合わせておられた。いつもの散歩コースで、たまたま通りかかったとのこと。このような場に巡り会えて、今日はとても良いことがあったと繰り返し言っておられた。散歩の時にも、いつもここで手を合わせておられるのだろう。

神社は全国に約8万1千社ある。ちなみに日本の住宅着工件数が88万棟（令和元年）なので、神社の多さがどれほどのものか分かる。日本にはお寺の数も7万7千山とたいへん多く存在する。日本人の信仰心の強さが伺える。当たり前に思っていることだと普段はなかなか気が付かないものだが、日本人の持っている自然に感謝をする心、命を大切に思う心はこのようにして育まれ、受け継がれているのだと思う。さて今日は地御前カキが食べたくなったな。

祭祀を開始する前の参拝のようす

トピックス

鯉のぼりで子どもたちへエールを

昨年からのコロナ禍で、さまざまな自粛が求められる中、子どもたちの学校生活もいろんな制限下にあります。そんな子どもたちへのエールの気持ちを込めて、鯉のぼりを揚げませんか。大きさの大小は問いません。地域の元気のシンボルとして、子どもたちの健やかな成長を願う鯉のぼりを揚げましょう！

期間は4月末から御陵衣祭（旧暦5月5日）の6月14日までです。

鯉のぼりの画像をメールで募集します。是非お送りください。

地御前小学校児童が全国大会で大活躍

3月28日に金沢市で行われたドッジボール全国大会で金剛寺ファイターズ（メンバー18名中4名が地御前小児童）が3位を獲得しました。

3月28～31日に代々木体育館で行われたミニバスケットボール全国大会（女子の部）に宮園クラブ（メンバー12名中3名が地御前小児童）が出場。それぞれの可能性を伸ばす大事な十代。いろいろな経験を通じて友達同志で支えあい、刺激しあってどんどん活躍の場が広がることを期待しています。

敬老（会）事業を見直しました。

地御前地区自治会では、貴重かつ有意義な敬老会とするため、令和3年度から、満77歳（喜寿）の方を対象にした敬老会を開催すると共に、寿年齢（80歳、88歳、90歳、99歳、100歳以上）の方には記念品を贈り、ご長寿をお祝いすることに致しました。

敬老会も成人式と同じように、人生一度の記念事業として、満77歳（喜寿）の方をお招きして、9月の第2日曜日に、地御前市民センターで開催するよう計画を進めています。華やかで楽しいひと時を共に過ごしましょう。

地御前地区運動会について

昨年度（令和2年）はコロナ禍によって中止を余儀なくされました。今年度の地区運動会は10月に計画しています。コロナ禍が収束し、オリンピック・パラリンピックが無事に行われ、その後に地御前地区運動会も例年以上に盛り上がることを祈っています。

編集後記

★編集も終わり印刷にかかろうとした時、河田悠希さんの東京オリンピック出場内定というビッグニュースが飛び込んできた。急遽、紙面入れ替え。校了が遅れた。祝事なのであしからず。　S・N

★三密を避ける、ソーシャルディスタンスをとる、マスクをつける、手洗いをするなど、コロナにかからないように生活するのも息苦しい。今は辛抱の時。ともにがんばりましょう。S・K

★3月28日は廿日市市議会選挙でした。投票率は46.7％。平成29年10月の衆議院選挙の全国投票率は53.6％。国政選挙よりもっと身近な選挙のはずなのに。　J・K

★ご意見・ご感想・記事の投稿リクエストなど何でも募集します。RXE15645@nifty.ne.jpまで。

［発行］地御前市民センター内
地御前地区自治会　広報事業部

初開催リレー マラソン

3月20日（土曜日）9時からグリーンフィールドにて地御前地区自治会体育事業部主催の第一回リレーマラソンが開催された。

地御前小学校6年生チーム、JFC地御前ジュニアフットボールクラブ、ハッピーオレンジ隊、主催者招待の地元在住アスリートの佐伯さん（60代、田屋在住で元町内会長、みやじま国際パワートライアスロンに参加）、森藤さん（子どもが地御前小学校に通学、福岡国際マラソンや広島国際平和マラソンなどに参戦）を加えた56名が競技に参加した。

裸足で激走を見せて下さった
6−1 船倉先生

グリーンフィールドの人工芝は歩くだけでも心地よく、集まった子どもたちはすぐに走ったり、飛び回ったりして元気に遊んでいた。

開会式では、地御前地区自治会・吉本会長、地御前小学校・林校長の激励があり、地御前を盛り上げようと活動をしているハッピーオレンジ隊によるダンスが披露され、観客も手拍子で一体となって楽しんだ。

背中タッチで走者交代
（6年生チーム）

競技は9時45分過ぎからスタートした。一人一周約200mずつを交代で60分間を走り、周回数をカウントする。

当初は経験豊富なアスリートの2人が有利と思われたが、やはり多勢に無勢。スタートから15分後あたりには、6年生チームやサッカークラブに追いつかれた。

一周200mは長いが、年少組の子どもたちも元気に一周を走り切っていたのには驚いた。人工芝を走るのは気持ち良いので、裸足で走る児童や大人が何人もいた。そんな姿を見て、家族に連れられて応援に来ていた他の子どもたちも飛び入り参加で走ったり、また、応援に来ていた地御前小学校の先生方（教頭先生、6−1船倉先生、6−2西尾先生）も生徒たちの熱い求めに応えて激走し、競技はとても楽しく盛り上がった。

結果は6年生チーム91周、JJFCサッカークラブ90周、アスリート2人組89周、ハッピーオレンジ隊79周を見事に走り抜いた。前日（3月19日）に卒業したばかりの6年生チームには特にいい思い出になったであろう。

開会式の途中には雨がポツポツ降り始めるという状況だったが、競技が始まると雨は止み、最後まで降らなかった。今年度はコロナ禍で体育事業部活動のほとんどが自粛に追い込まれたが、このリレーマラソンは、そんな中でも開催可能な活動を模索し、開催のタイミングをうかがってきたもの。今年度特別に計画された活動だったので、来年も行われるかどうかは未定だが、久しぶりに元気な子どもたちの笑顔を見ることができて、大人たちも元気をもらうことができた。

ハッピーオレンジ隊やJJFC地御前フットボールクラブは男女を問わず、いつでも参加者を募集しています。興味のある方はお気軽にお問い合わせください。

令和3年のとんど

首都圏の緊急事態宣言の影響で、開催が危ぶまれたが、人出を抑えるために焼き牡蠣、おでん、ぜんざいなどの提供を中止し、感染拡大防止対策に細心の注意を払った上で1月10日（日曜日）に行われた。

事前に郷土文化保存会の方々が地御前小学校に行き、「正月」「希望」「成長」「平和」と各学年の子どもたちが書いた書き初めを持ち帰った。今年は集まって作業ができなかったので、有志の自宅でそれを6枚ずつ縦につなぎ合わせて幟状にした。通学路の見守り隊をしている方は、顔馴染みの子どもたちの書き初めを見つけると嬉しい、と話しておられた。

1月10日　当日午前の準備の様子

とんど当日の朝8時から、会場となる地御前神社沖の埋立地で牡蠣筏の資材置場である広場に30〜40名が集まって準備が開始された。野坂中グラウンドに張り出して邪魔になっていた裏山の竹をPTAと自治会の有志（地域学校協働活動）で11月28日（土曜日）に伐採し、事前に運び込んだ竹やぐらに積んだ。

やぐらは多くの竹や木で組まれていて、燃料をかけなければ、なかなか点火できないように見えたが、年男・年女が種火から取った藁の小さな束で火をつけると、瞬く間に炎が大きくなって、ドン！パン！と音を立ててメラメラと燃え上がった。どんどん燃やす、とか、竹が破裂するドンという音がとんどの語源だという説がある。

点火から僅か3分、あっという間に中央の真柱の笹の葉は燃え尽きてしまい、書き初めは燃えて、灰が小さくなりながら高く舞い上がっていた。

火の勢いは点火から僅か4〜5分でピークとなり、その時は「これ、大丈夫？」と、ちょっとした恐怖を感じるくらいの火勢と音だった。ベビーカーに乗った幼い子どももワァーっという歓声をあげて見入っていた。何か自然の力と人の制御できる力の狭間にある象徴を見ている気がした。

点火後6分程度で真柱が、郷土文化保存会会長の美川さんによって恵方に引き倒された。点火から約30分で櫓は跡形もなく燃え崩れた。

コロナ対策のために、来場者に受付で記名や連絡先などをお願いしたが、最終的には312名の記入があった。そうして完全に火が消えて灰になった後、灰は大神地区の栗林の畑に持ち主のご好意で捨てさせてもらった。

地御前ではいろいろな地域行事が運営されているが、昔からの地の人だけではなく、転入して来た人とのハイブリッド化がバランスよく進み、その中で家庭・家族・地域の環境変化への適応が上手く進んでいるように思う。

地御前地区自治会、郷土文化保存会、長寿会は地御前地区の活動や行事を行っているが、運営に携わる方々は重複していて、風通しが良い。いつも住み良い町、より幸福で豊かな関係性を目指している。

地御前の歴史や文化、年配の方々の知恵と経験、子育て世代の意欲と多様なニーズ、若者のパワー、子どもたちの活気と親しみやすさが、いろんな活動で適材適所で発揮され、垣根が無くなって、どんどん住みやすさや人のつながりを実感する人が増えていって欲しい。いろんな地域活動や、全世代間のちょっとしたギブ・アンド・テイクで、より豊かで幸せな生活がますます広がる地御前であることを祈念したい。

実母と娘のブルース3

それから長女は、神戸、大阪、広島のファッションショー、地元フェスのアイドルステージなど控えており、また、アクター○広島に入学する為のオーディションもある中で、今までで一番忙しい夏休みを迎えました。またその一方で、私の母は少しずつ弱ってきていました。

そして、母の意識も薄れてきた頃、東京で行われる、全国誌の小中学生向けファッション雑誌『Cuugal』創刊号のモデル起用オーディションが、控えていました。

私はものすごく悩みました。毎日毎日考えました。長女は受けたいばっかりでそれもそのはず、モデルを目指している本人にとっては、編集部から直接お声をかけて下さったのですから、行くしかないですよね。

でも私はとても嫌な予感しかありませんでした。実は、半年前母が入院した頃に、私の父が「7月末まで持つかな…」と、ぽそっと言ったのです。

入院した頃はまだまだ母は元気だったので、私は「縁起でもない事言わないの！もう。」と聞き流した事がありました。

東京のオーディションは7月30日午後でした。人数が多いので6時くらいには終わるだろうと言われたので、ホテルも予約し、次の31日夕方に帰路につこうと計画を立てていました。私は悩みに悩んだ挙句、母と一番仲良くしていた叔母に聞きました。

叔母は、「お母さんは昔から身体は強いんだから大丈夫よ！それに、お母さんはきっとこう言うよ。『私の事は気にせずに行きなさい！子どもの方を優先しなさい』ってね。私もそう思う。未来のある子どもを最優先するべきだから、何にも考えずに行っておいで！」と、ポンと背中を押してくれました。私は涙が止まりませんでした。

そして…東京に行き、無事にオーディションが終わり次の日の令和元年7月31日午前中、母は息を引き取りました。危篤の連絡をもらい、急いで新幹線に飛び乗りましたが、帰りの新幹線で息を引き取ったと兄から連絡が。結局最期を看取ることはできませんでしたが、それでよかったかな…と今でも思います。息を引き取る母の姿がいつまでも脳裏に残ってしまうかもしれないので…それより、母はオーディションが無事終わるまで、がんばってくれたのだと思います。長女の活動を誰よりも応援してくれていた母だったから…。

そして、数日後、『Cuugal』から、初代サポーターモデルとして、採用通知を頂きました。誰よりも先に、母のお骨の前で報告しました。

だから、この『Cuugal』という雑誌は思い入れがあり、いつまでも人気雑誌として続いて欲しいと願い続けます。おかげ様で一年が経ちますが、今春、地御前小学校を卒業した長女は今年の2月号まで掲載して頂きました。母もきっと応援してくれていると思います。

N・T